

## 児童健全育成賞（数納賞）

# 事務所を子どもたちに開放した実践事例 —お茶の間のような事務所から見えてきたもの—

東京都三鷹市

三鷹市西多世代交流センター 児童厚生員 宮 村 真 紀

## 1. はじめに

三鷹市西部に位置する西児童館は学童機能を持たない市直営の児童館で利用者は一日平均170人、学校が早く終わる水曜日は300人を超える賑やかな児童館である。以前、私は市内の公立幼稚園に勤めていたが、園児数の減少に伴い幼稚園が全廃となったため異動先として児童館を希望し、平成19年春にこの西児童館に赴任した。職員は概ね5年で異動となるが、私がやつてきたことで当時児童館を利用する子どもたちにとって母親的存在であった職員のAさんが着任後2年で他の職場に異動することになってしまった。当時から児童館には乳幼児親子や小学生に混ざって、中学生や高校生やもっと上の年齢の人たちが次から次へと入れ代わり立ち代わり来館していた。その中に事務所に入り浸る子どもが毎日複数いて、ある日私はそのうちの一人に「お前が来たせいでAさんがいなくなった。お前なんか俺は絶対認めない。」と言われてしまった。私は完全に招かれざる職員であった。

事務所にはそれでも毎日子どもたちがやって来て、平然と空いている椅子に座り、大声で喋ったり笑ったりペットボトルのお茶を飲んだり、我が物顔で過ごしていた。「え？誰も注意しないの？」と他の職員を見渡すが子どもたちを注意することもなく一緒になってお喋りをしている。私は疑問を感じつつも黙って様子を見てい

る日が続いた。すると彼らの会話や様子からこの事務所が彼らの居場所になっていることが分かつてきた。さらに、彼らがそこで職員に相談をしたり、職員の仕事を手伝ったりする姿も見えてきた。その姿は、さながら家の茶の間で父親や母親と過ごしている子どものようで、このお茶の間のような事務所がこの子どもたちにとっては必要な場所なのだと理解するのに長い時間は必要なかった。

しかし、一般的には事務所に子どもが自由に出入りしている姿は奇異であるため、多くの方にその意味を理解してもらわなければ維持することができない。今回、私がこの賞に応募を決心した最大の理由がそこにある。そこで、事務所があったからこそ守ることができた子どもの事例を紹介しながら、事務所開放の問題点と必要性について説明をしたい。

なお、この春の組織改正で西児童館は西多世代交流センターと名称を改め乳児からお年寄りまでが利用する施設となつたが、ここで報告するのはこれまでの実践記録なので西児童館と表記する。

## 2. 事務所に入り浸る子どもの事例

児童館の事務所に頻繁にやってくる子どもたちは根深い問題を抱えていることが多く、大人への猜疑心も大きいため、新たな関係を構築するには時間がかかる。招かれざる職員である私

は事務所で様々な子どもと信頼関係の構築に奮闘する日々が始まった。

**事例1 中学校卒業直後のBさん**

(小学校四年生からサポート)

Bの両親は離婚し父親と暮らしていたが、食事も用意されていないことが多く、学校の給食が命綱という環境だった。私がBと出会ったのはBが中学校を卒業したばかりの頃だった。進学も就職もしていなかったBは毎日のように児童館に遊びに来ていた。ある日、Bは他の職員がいない時を見計らって「刺青を入れたいから、どこでできるか調べたい。PCで検索したいから貸して」と私に言ってきた。私は「そんなことに協力はできない。断る。刺青なんか入れるのはやめな。」と答えた。するとBは激怒し、私に殴りかかって来た。私は痛みに耐えながらも断固として要求を飲まなかつた。見かねた周りの子どもが止めに入り、何とか私から離されたBは「おまえウザイんだよ！二度とこんな児童館来るか！」とわめいて出ていった。翌日、事務所で私が「Bにぶたれたところが痛くて仕方ない。今日は私の仕事を手伝ってよね。」と言うと「しょうがねえな。」と言いながら仕事を手伝ってくれた。Bの事実上の謝罪であった。結果的にはあの時、要求をのまなかつたことで私たちは急速にその距離を縮めることが出来た。Bは無意識に私が本当の意味で大切にしてくれる大人かどうかを試したのだ。

その後Bは私に「頑固なおばさん」というレッテルを張り、私を含めた数人の職員と事務所で他愛もないお喋りを重ねながら関係を築いていった。事務所はいつでも職員と直接話ができる場所として機能していた。

**事例2 中学三年生のCさん**

(小学校一年生からサポート)

Cの母親がギャンブル依存症であることが原因で両親は不仲であった。更に家庭の経済状況が苦しいため、Cにとって家は居心地の悪い場所だった。精神的に不安定な上、内向的な性格も原因となり中学時代に友達との関係につまずくと学校が怖くなる。朝、児童館に寄って職員

と一緒に学校に行こうと努力していた。その職員が私の前任のAさんだった。引っ越し思案なCがやっと仲良くなったAさんを失い「今度来た人とは仲良くなれないかもしない」と言い学校に行けない日が増えていった。私も自分からはどうすることも出来ないでいたが、Cは毎日のように事務所にやって来て、私が事務所で他の職員や子どもとお喋りをしている姿をじっと見て観察していた。日頃の私の様子から徐々に不安が払しょくされ距離を縮めていくことが出来たが、本当に安心して一緒に居られるようになるまでは半年近くかかった。事務所は職員の人となりを観察する場所として機能していた。

**事例3 高校3年生のDさん**

(小学校一年生からサポート)

Dは明るい性格で誰とでもすぐに仲良くなれる。他の子どもが警戒する中、Dは比較的積極的に私に話しかけてくれたが、こんなに問題のなさそうなDがなぜ頻繁に事務所にやってくるのか理由が分からなかった。

しかし、時折聞こえてくる他の職員との会話からDが家族のことで苦しんでいるのが分かつて來た。新参者の私がDの話に入ってはいけないと思い、距離を取っていると、ある日Dの方から私に意見を求めてくれた。「相談するに値する人間だと思つてもらえたのかな」と感じた瞬間だった。この時の事務所は職員が子どもの置かれている環境を知る場所として機能していた。

この3人以外の子どもたちも事務所にやって來ては、あの手この手で私に試し行為をしてきた。が、毎日他愛もないお喋りをする中で、徐々に子どもたちから警戒心が消え、招かれざる職員という私のイメージは少しずつなくなつていった。このお茶の間のような事務所がなかつたら、当時10人を超える手のかかる大きな子どもたちとの信頼関係を作るにはもっと時間がかかり、子どものケアも遅れたことと思う。

信頼関係が出来てからは一人ひとり全く違う背景に困惑しながらもその解決に向けて、じっくりと寄り添い続ける日々が始まった。困難を

かかえて生きている子どもが自立するには、支え続ける人と時間そして場所が必要である。Bさん、Cさん、Dさんそれぞれのその後からもそれが分かる。

#### 事例1の刺青をいたかったBさんのその後

Bは相変わらず十分に食事をとれていないことが多かった。いつも事務所にやって来ては「腹減った～」とつぶやいていた。私たちは中高生世代対象に「食べよう喋ろう」という企画を考え、一緒に調理し食べる場を設けた。簡単な食事でもニコニコと嬉しそうにほおばるBの姿は今でも忘れられない。Bは事務所にやって来ては友達との出来事の話をし、私たちはその度に叱ったり笑ったりしていた。中学卒業後しばらくして塗装業の見習いとして働き始めたが簡単に世の中に順応できるはずもなく、無断欠勤や退職を繰り返していた。Bがその報告に来るたびに全職員で話を聞いた。その後Bの心の性が戸籍上の性と異なっていることを告白され、私たちはBの悩みが家庭だけでなかったことを知らされた。職場での信頼が厚くなってきた26歳の現在、自分の会社を立ち上げる準備を始めている。Bが児童館に来るようになって16年が経ち、その間、異動があるたびに職員間のバトンタッチが繰り返された。今でも時折、事務所に顔を出し近況を報告しにやってくる。さながら実家に里帰りするかのように。

#### 事例2の内向的だったCのその後

知り合って半年後、Cと私は本の貸し借りをしては事務所でその感想や意見交換をするようになっていった。そんなある日、Cが児童館の片隅で「なぜ自分はこんなに勉強してこなかつたのか」と泣いている場面に出くわした。そこからCは毎日のように事務所で勉強するようになり、不登校気味だった学校にも頑張って行くようになった。その後進学を希望したCは都立の定時制高校を受験し入学した。高校卒業後は美術大学への進学を夢見るが、必死にアルバイトで貯めた進学に必要なお金をギャンブル依存症の母親に全額盗られてしまう。Cが顔面蒼白でこの報告をしに事務所に来た時は私も言葉が

見つかず、二人で呆然と夕日を見ていたのを覚えている。その後Cは大学進学を諦め職業訓練校に通い、家具職人として就職をするが、仕事を覚えるのに時間がかかりすぎ退職。次にアニメーターの仕事に就くが、やはりそこでも極端に仕事が遅かった。そのため、社長から叱られることが続き、ついには灰皿で頭を殴られそうになるなどギリギリの状態になり退社。Cは「自分は何故こんなにも仕事が覚えられないのか」と事務所に相談に来た。「もしかしたら自分は何か障がいがあるのかもしれない」という本人の一言があり、私も以前から特徴的なものを感じていたので病院での検査を勧めた。診断結果は発達障害だった。その結果を受け止め自分の苦手分野も理解した上で、障がい者枠で病院の給食調理の仕事に就くことが出来た。中学1年生だった彼は現在25歳、児童館に来始めて13年。前任のAさんを失って不安だった内向的なCが今でも時折事務所にやってきて仕事の悩みなどを話してくれるのは、ゆっくり関係を紡げる事務所があったからだ。

#### 事例3の誰とでも仲良くできるDのその後

Dが誰とでも仲良くでき、どんな時でも明るいのは自分の内なる苦しさを人に悟られないようになっていたからで、更には、そこに真正面に向き合うと自分が壊れてしまいそうだったからだ。Dの母親は父親と離婚後行方が分からぬ。父親は再婚しDには弟と妹が出来たがDのみ祖母宅で生活することを強いられ、父親と継母、弟妹とは別に生活をしていた。Dが高校生になった時によく一緒に生活を始めるが、高校進学にかかったお金や家族旅行の自分の代金は借金として親に返済するよう求められ、アルバイト代を全額親に収める日々が始まった。門限を破ったり嘘をつくと、罰則として借金は振り出しに戻された。Dは時に両親から暴力を受けることもあったがそれでもいつの日か家族と幸せに暮らせる日が来ると信じていた。抱えきれない苦しさを吐き出すために、アルバイトの前に親に内緒で児童館に寄っては私たち職員に胸の内を話していた。ほんの10分、15分という時

間を作ってくれるDに、私たちは「困ったことがあったらいつでも相談に乗る」というメッセージを送りながらDの話に耳を傾け続けた。高校1年生の終わりに、とうとうDは抑圧された生活に耐えきれず警察に助けを求め、連絡を受けた私も同行した。しかし、いったん児童相談所から施設に入るも、再び家に戻され今までと同じ生活が始まった。事務所に愚痴を吐きに来る顔は日に日に疲れていったが、高校3年生の時に再び「また家に戻されるかもしれないけれど、それでもいいから家を出たい」とSOSを出してきた。私は子ども家庭支援センターに連絡をするが、18歳を超えているということで動けないことが分かった。そこで母子自立支援をしている部署に連絡を取ってみた。幸いにもDの苦しい状況を理解してくださった担当職員の協力があり、支援を受けられることになった。親が探しに来る可能性も大きかったので生活福祉課の担当職員の協力を得てシェルターにも入ることができた。そこからDは介護職員初任者研修の勉強をして資格を取り、自立の道を歩み始めることになった。Dは現在22歳。高校の時に付き合っていた相手と結婚し夫婦共働きで生活している。時折、夫婦で事務所にやってきて、苦しかった時代の話や未来の話を笑いながらしている。Dは小学1年生から児童館に通い始め、実に16年が経過し、常に事務所は核となる場所になっていた。

すぐさま命にかかる場合を除けば、子どもが本当にアクションを起こしたいと思う時が最大のチャンスである。あの手この手で試し行為をする子どもとの関係づくりから始まり、問題の掘り起こしから子どもの決意を待ち、解決に向かうまでには長い年月が必要である。この事例からも分かるように、子どもが自立していくまでの日々を支えるには一人の職員では対応しきれず、職員から職員へのバトンタッチが必要不可欠である。また子どもの非常事態は突然やってくる。いつでもそれに対応でき安心して自分をさらけ出せる場所も必要である。この事例はほんの一握りで、他にも家出、リストカット、

妊娠、万引き、窃盗、暴力事件など様々な問題に直面してきた。この子どもたちを自殺や売春、反社会的勢力から守ることが出来たのは、いつでもじっくり話ができる場所と職員間のバトンタッチによるスムーズな移行、そして関係機関の協力が得られたからに他ならない。

### 3. 問題の表出からそれを乗り越えるまでの過程について

問題を抱えたまま小学生から中学生、高校生と成長していく子どもたちの話を事務所で聞いているうち、問題が表面化していく過程に共通性があることに気付いた。

小学校時代は親を信じている時代だ。この時期の子どもは何となく「周りと違うな」とは感じていても、親は絶対であり親の言うことに間違いはないと思っている。親に殴られても「お前が悪い」と言われば、それを素直に受け止める。「昨日はママの彼氏にぶたれたんだ。でも謝らなかった俺が悪いんだ」、「昨日から何も食べていないの。私が部屋を片付けなかつたら仕方ないんだけど」など、事務所に入り浸る小学生との会話の中から家庭の様子が見えてくる。「ぶたれて痛い時は私たちに話してね。必ず力になるから」と声をかけ続けるが、この時期の子どもから直接SOSが出ることはほとんどない。親が悪く言わされることを避けるために「でもパパは優しい時もある」などとかばつたりする。少し詳しく話を聞こうとすると、突然話を変えて「これ以上この話は続けたくない」という意思表示をされることもよくある。自分が置かれている状況は特別なことではなく、他の家も同じだと思っている節もある。事例のDさんが小学生時代はまさにこの状況だった。

ただ、直接のSOSはしないものの、学校に行き渋るという表現をする子どもはいる。家をいつもの時間に出発するが学校に行けず、児童館にランドセルを背負ってやってくる。その場合、児童館では本人に承諾を取って学校に連絡をし、本人が3時間目から行くといえばそれを伝え一緒に登校する。学校に連絡することを拒

否する子どももいるが、「先生が心配するよ」と説明するとたいていの子どもは了解する。どうしても拒否する時は連絡をしないこともある。でもそういう時は「みんなが心配するから明日も学校に行けなければ、明日は連絡するからね」と約束をしている。学校を途中で抜け出して児童館に来る子もいる。そんな時もやり取りは同じで、本人に了解を取って学校に連絡をする。急いで先生が子どもを迎えて児童館に来ても、本人がどうしても先生に会いたくないと言えば、一旦お帰りいただき、その後状況を連絡するようにしている。学校との関係は大切にしながらも、子どもが出したサインにはできるだけその気持ちに沿うようにしている。

「児童館は子どもに甘い」という人もいる。でも、頑張らなければならないことは分かっていても頑張れない子どもに「もっと頑張れ」とは私たちには言えない。ただ、そこで子どもをかくまっているだけでは道が開けない。子どもとの会話から得た情報の伝達や新たな情報収集のために、小学校や子ども家庭支援センター、生活保護世帯ならばその管轄部署などにも連絡を取る。思春期になる前に数年かけて信頼関係をしっかりと築くことが、この時期一番重要なことだ。

中学に入ると、気づきの時代がやってくる。視野が広がり、自分の家と他の家を客観的に比較し自分の置かれている状況を理解することができるようになる。小学生時代はぼんやりとしていた違和感が「やっぱりうちの親は他の家の親と違う」という確信に変わり問題が表面化してくる。しかし、義務教育中であり自力では生活できないことも分かっているので、親から離れたくともそれを行動に移すことは出来ない。子どもたちが一番苦しい時期かもしれない。思春期も相まって、その苦しい気持ちを晴らすかのように荒れだすのはこの中学時代だ。実際に事例のBさんが私を殴って来たのはこの年齢の時だった。子どもは様々な方法で自分の体の中にあるマグマのような怒りを爆発させて、職員との闘いが始まる。図書室の棚に入ってい

る本や置いてあるチラシを全部ばらまく、ドアを蹴破る、窓ガラスを割る。外に向かって怒りを表現できない子は、家出をする、手首を切るなど自分を痛めつける。異性と夜遊びをすることで、ひと時自分の置かれている状況を忘れようとする子どももいる。その表現は様々だが根本にあるのは怒りや悲しみだ。この時期の子どもには職員が体を張ってその行為を止め、非社会的行為については絶対にやってはいけないと伝えつつも「明日もまたおいで」と声をかける。翌日子どもがやって来た時は、落ち着いて昨日の失敗を理解させながら、楽しいお喋りの時間を持つようにする。ただ、怒りのマグマをかかえた子どもが一度や二度の闘いで変化するわけないので、何度でも諦めず「ダメ」と「おいで」を繰り返す。どんなに悪いことをしても決して出入り禁止などにはせず「待っている」と伝える。この時期は子どもだけでなく職員も一番苦しい時期かもしれない。が、「困った行動をする子は困っている子」を合言葉に他の職員と支えあい、事務所にいる職員全員で子どもに向き合っていく日が続く。また、中学に入ると小学校時代よりも食事が用意されていない回数が増えてくる。成長期にも関わらず空腹なため、万引きをしてしまうこともあるので、この時期は食事をとらせる必要もある。以前は「食べよう喋ろう」の企画実施の時にしか食事をとらせられなかつたが、現在は予算を取って非常食を常に準備しておけるようになった。子どもが児童館で食事をとる時はなるべく職員もその場に同席し、リラックスできるようにしている。この混沌とした中学時代を職員と一緒に乗り越え、どんな時も職員は自分を見捨てなかつたという思いが持てるとその辯はさらに強くなり、いろいろな相談を素直にしてくるようになる。

高校生世代（西児童館では高校生とは言わず、高校生世代と言うようにしている。なぜなら高校に入らない子や進学してもすぐに中退する子が常に複数いるからだ）になるとはっきりとSOSを出すようになる。「もうこれ以上我慢で

きない」と親から離れる決心が固まって、行動に移すための相談をするようになる。高校に通っている子どもには「卒業まであと少しだから、何とか頑張れないか」と説得はしてみる。それでも無理だという子には、親から離れるために施設に入るか就職するかの選択肢があることを伝える。事例のDさんのように、一刻も早く家から離れたい子どもには施設という選択になるし、事例のCさんのように少し時間をかけて準備する余裕がある子には就職という道をアドバイスする。どちらにせよ我々職員だけでは道が開けないので地域の人や関係機関と連携し、一緒に模索する日々が始まる。もちろんどの子どもも一筋縄では行かない。事例のBさんのように就職するがすぐにやめるということも織り込み済みだ。負の連鎖はそう簡単に子どもを自由にはしてくれない。

このように年齢によって支え方は変化するが、長い年月をかけてずっと見守り続ける大人があれば必ず子どもは立ち上がり歩き始める。困難を抱えて生きている子どもが歩き続けるには信頼できる大人が長期に援助することが必要で、その関係を保ち続けるためには、いつでも大人がいて安心して話ができる場所が必要なのである。

#### 4. 事務所の開放は本当に必要なのか

正直なところ、事務所に子どもが立ち入るデメリットは多い。まず、落ち着いて仕事ができない。周りで子どもがお喋りをしているので集中しにくいのだ。自分が席を外して再び事務所に戻ると、私の席に子どもが座っていることなどいつものことだ。デスクに落書きされることもある。子どもの喋り声が大きくて電話の声が聞き取れることもある。個人情報の管理も人一倍気にしなければならない。PCに文字を打ち込んでいると何気なく覗き込んできたりもある。子どもたちはリラックスして楽しそうに過ごしているが、私たち職員は常に気を張らなければならない。ではなぜ事務所を開放しているのか。

一つ目の理由は、いつ子どもが来ても必ずそこには職員がいるからである。先の事例でも分かるように、突然の緊急事態に対応しなければならないこともある。緊急事態ではなくとも事務所にやってくる子どもは大人と話したがる。事務所に頻繁に入りする子どもは家がリラックスの場になっていない。彼らにとっては事務所がリラックスの場であり、それが故に、職員とあたかも家族のように笑ったり怒ったり叱られたり褒められたりしながら素の自分を出しているのである。いつ来ても必ず大人がいるのは事務所だけである。

二つ目の理由は、片手間に話を聞いてもらえるからだ。大人と話はしたいけれど「さあどうぞ相談してください」と言わんばかりに真正面から向き合われると尻込みしてしまう。台所で料理をしている母親に話しかけるように、何となく話を聞いてもらえるくらいが丁度良いのだ。事例のCさんのように職員がどんな人間なのか距離を取って観察したい子どもにとっても、ちょうど良い距離感なのだ。困難を抱えた子どもは基盤となる親との関係がうまくいっていない事が多いため、大人を信用していない。事例のBさんのように事務所での手この手で職員を試し、対自分だけでなく他の子どもとのやり取りもしっかり見ながら、この大人は信用できるかを品定めしている。だからこそ、全職員となんとなく会話しながら関係を作れる場所が必要なのである。

三つの理由は、子どもの話を職員が共有できるからだ。子どもはいつも全職員に心を開いているとは限らない。ある特定の職員にだけ相談するということもままある。しかし、その相談を事務所ですので直接話を聞いている職員でなくても当然話は耳に入ってくる。周りの職員はそ知らぬ顔で自分の仕事をしながら、そっと耳を傾けてその子のつぶやきを聞くことができる。その子どもが来た時にお目当ての職員がいなかったとしても、周りの職員はその子の状況を理解しながら見守れると共に自然と情報共有できるのである。職員の異動の際も職員間の

バトンタッチはスムーズになり、子どもの不安を軽減することにつながる。

四つ目の理由は事務所にやってくる頻度が子どもの困り具合のバロメーターになる点だ。頻繁にやってくる子はそれだけ困った状況に置かれていることが多い。たまにやってくる子は嫌なことがあった程度。頻繁に来ていた子があまり事務所に顔を出さなくなり、友達と遊べるようになった時は問題が良い方向に向かっていることを指す。このバロメーターが狂うことはほとんどない。

これだけの機能が果たせる環境が他に作れるのであれば無理にそれが事務所である必要はないのだが、西児童館ではここしかなく、必然的に事務所が子どもの居場所となっている。心配していた個人情報については、子どもたちは自分のことで精一杯で全く興味がないことが分かった。パソコンを覗き込んだりもするが、それはどんな仕事をしているのかとちょっと興味を持つただけで、内容に興味があるわけではないのだ。デスクの落書きも、椅子に座られてしまうのも、お喋りも、こちらが嫌だと思うことはきちんと伝えれば止めてくれる。事務所を必要としている子どもたちにとって、ここに入れなくなるのは一番困ること。だから子ども同士が注意しあったり、兄弟のように上の子が下の子をたしなめることもある。子どもたちは自分たちだけが溜まる場所ではなく、信頼できる大人がいて安心して過ごせるお茶の間のような場所を欲しているのだ。

## 5. 壁を乗り越えて

ここまで、いかに事務所が子どもたちにとって必要な場所かを書いてきたが、実は大きな失敗もしている。

それは4年前に事務所で盗難事件が起きたことだ。私の机に入れておいた小銭がなくなってしまったのだ。いつもはお金を持っていないEがたくさんのお菓子を買い込んできたのを不審に思った別の事務所常連の子どもがEに問い合わせ、「自分が盗った」と白状した。私たちは

Eの保護者と話し合いの場を持ち、中学生のEに盗癖があることが分かった。私たちは「こんなに迷惑をかけたので二度と児童館には来させない」と言う父親を説得し、今後も今まで通りに来館させる許可を得た。Eを来館させないという方法でこの一件を決着させるのではなく、盗癖を持っているEとこれからも向き合っていく道を選んだのだ。この出来事から、子どもを信用するということと、きちんと物の管理をすることは全く次元の違う問題であったことを大きな痛みと共に知らされた。子どもに不要な欲望を喚起させてしまったことを後悔し、何を変えていくべきか話し合う事になった。

その結果、貴重品は鍵のかかるロッカーに入れ、書類も鍵のかかるキャビネットに入ることにした。児童館を利用する子どものゲーム機なども預かっていたが、それも鍵がかかるロッカーに入れることにした。

この一件の他に、もう一つ考えなければならない事があった。それは以前から事務所に子どもを入れることに難色を示していた市役所の方針だ。これまで子どもが個人情報に興味を示さなかつたとは言え、今後何があるかわからない以上当然のことと思う。また、児童館を時々しか利用しない保護者にも理解してもらう必要があり、何か工夫できることはないか模索した。その結果、部屋の名称を事務所兼相談室と改め、物や書類の管理を徹底するとともに、PCなどの機器を守るために事務所内の飲食は禁止とした。どんな事態でも事務所を空にしないことも共通認識した。あれから4年、相変わらず小学生から高校生世代の子どもが事務所を居場所にしているが、このような事件は起きていない。

## 6. おわりに

事務所に子どもを入れさせないという事が一番簡単に諸問題を解決する方法なのは分かっているが、それは「困っている子どもたち」から安心して大人にかかる場を奪うことになってしまう。事務所に子どもを入れることに批判的な人がいる一方で、これまでの小さな改革の

## 事務所を子どもたちに開放した実践事例

積み重ねを理解していただけたのか、その効果に納得し理解し後押しをしてくれる市民も出てきた。これからも事務所を子どもたちの居場所として開放し続けるためには、常に今いる子どもの様子に合わせて、そのあり方を変容させ続ける努力と周知が必要である。

先日、男子高校生が事務所の椅子に座って言った。「仲間と待ち合わせて遊ぶ溜まり場は他にもある。だけど一人でも安心して来られる居場所はここだけだ。」と。途切れることなくやつてくる小・中・高校生世代の子どもたちがここを頼りにしている間は、このお茶の間のような事務所を閉じるわけにはいかないのだ。